

# HIMALAYA

## ヒマラヤ

### No. 177



**1986 AUGUST**

**日本ヒマラヤ協会**



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

## 〈登山隊々員募集〉

### —— 未踏のロマンを求めて ——

## ラブチェ・カン (7,367m) 登山隊

こつこつと積み重ねてきたH A Jの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、1987年秋にチベットの未踏峰ラブチェ・カンをチベット登山協会と合同で登山することになりました。この山はヒマラヤ登山の大先輩であるE・シプトンがメンルンツェ偵察(1951年)の折りの報告で「その先のチベット高原の彼方に人跡未踏のラブチェ・カン連峰の山々が望まれた」と記しているとおり7,000m峰数座を含む未知の山群の主峰です。合同登山の主旨を理解されて積極的にご応募下さい。

1. 目標の山 チベット自治区 ラブチェ・カン  
(拉不及康峰・Lapche Kang 7,367m)
2. 時 期 1987年9月～11月(75日間程度)
3. 募集隊員 10名

4. 個人負担金 120万円
5. 隊員資格 ①H A J会員であること ②個人負担金を納入でき準備に参加できる者 ③登山技術・体力・健康状態・協調性など合同登山の主旨に合致する者

ラブチェ・カン周辺図



### 表紙写真

1週間に亘る悪天も去り、久し振りにトリボールやモムヒル・サール(7,342m)が朝日に輝いている。モムヒル氷河の源頭に聳えるモムヒル・サールは、“老婆の牧場”の意味だと云う。

(東京志岳会マラングッティ・サール登山隊)

## ヒマラヤ No.177

1. 岷山の霊峰へ —— 日中四川雪宝頂合同登山隊計画
6. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・ヒマラヤから〉
10. ポーランド登山家を迎えてのシンポジウム
13. ウルグ・ムズターグ初登頂 —1985年秋— 周 正
18. 卓奥友登頂 —— 張俊岩・成天亮
23. ヒマラヤの報告書紹介⑳
24. 寸感・事務局日誌

# 岷山の霊峰へ

## — 日中四川雪宝頂合同登山隊計画 —

### 趣 旨

日本ヒマラヤ協会（H A J）は、1967年創立以来ヒマラヤ諸国との友好親善・相互理解をモットーに登山・踏査・学術その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開してまいりました。

扱、此の度、こつこつと積み重ねてきましたH A Jの登山実績と国際交流・渉外活動が実を結び、中華人民共和国四川省登山協会との合同により、日中四川雪宝頂合同登山隊を派遣することとなりました。

雪宝頂（5,588m）は、中国・四川省の北、甘粛省との境を成す岷山山脈の最高峰であり、未踏の霊山であります。そして、その山容は文字通り天をさす白い三角錐の美しい山であります。

また、岷山は“パンダの故郷”であり、付近には中国の第一級の自然保護区である“九寨溝”があります。

H A Jの日・中合同隊としては、1985年の日中女子合同隊に次ぐ2回目の合同隊であり、四川省が全面的にバックアップする体制になっております。云うまでもなく、合同登山は高所登山の経験はもとより全般にわたる豊かな経験と明朗な人柄なくして成功することはできません。今回の合同登山におきましては、登山の成功は勿論ですが、より安全登山に心掛け、微力ではありますが登山

### ▲ 岷山々脈の最高峰、雪宝頂（5,588m）

を通じて、日中両国人民の友好親善に尽す所存であります。

何卒、登山の趣旨をご理解いただきまして、ご協力下さいますようお願い申し上げます次第であります。

1986年4月

日中四川雪宝頂合同登山隊  
隊長 遠 藤 登

### —— 計画の概要 ——

#### 1. 隊の名称

日中四川雪宝頂合同登山隊  
China-Japan Joint Mt. Xuebao Ding  
(Sichuan) Exp. 1986.

#### 2. 目標の山

中華人民共和国四川省松藩県  
雪宝頂（シュエパオ・ディン）  
Mt. Xuebao Ding（5,588m）

#### 3. 登山期間

1986年7月25日～8月21日（28日間）

#### 4. 目 的

- 1) 日中合同による雪宝頂の初登頂
- 2) 日中登山交流

#### 5. 主 催

日本ヒマラヤ協会  
四川省登山協会

6. 隊の構成

総隊長～四川省人民政府高官  
 隊長～日本ヒマラヤ協会副会長  
 副隊長～四川省登山協会高官  
 登攀隊長～日本ヒマラヤ協会常務理事  
 登山隊員～日本側：8名、四川省側：5名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会雪宝頂合同登山隊実行委員会  
 会長 柴田 金之助 (H A J 会長)  
 副会長 遠藤 登 ( " 副会長)  
 実行委員長 稲田 定重 ( " 専務理事)  
 事務局長 山森 欣一 ( " 事務局長)  
 実行委員 尾形 好雄 ( " 常務理事)  
 " 飛田 和夫 ( " " )  
 登山隊々員

8. 隊の事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
 淀橋食糧ビル506号

9. 現地連絡先

中華人民共和国四川省成都体育場路1号  
 四川省登山協会 電話 2927

10. 留守本部

隊の事務局に同じ。

27日 成都滞在  
 28日 " "  
 29日 成都→松藩 (バス)  
 30日 松藩滞在  
 31日 松藩→キャラバン (馬)  
 8月1日 B・C (約4,170m) 着  
 2日 }  
 3日 } 登山期間 (12日間)  
 13日 }  
 14日 B・C → キャラバン  
 15日 松藩着  
 16日 松藩→成都  
 17日 成都滞在  
 18日 " "  
 19日 成都→北京  
 20日 北京滞在  
 21日 北京→成田 (JAL)

— 隊員構成 — (①生年月日 ②所属クラブ  
 ③勤務先 ④住所  
 ⑤海外登山経験)

1. H A J 側陣容

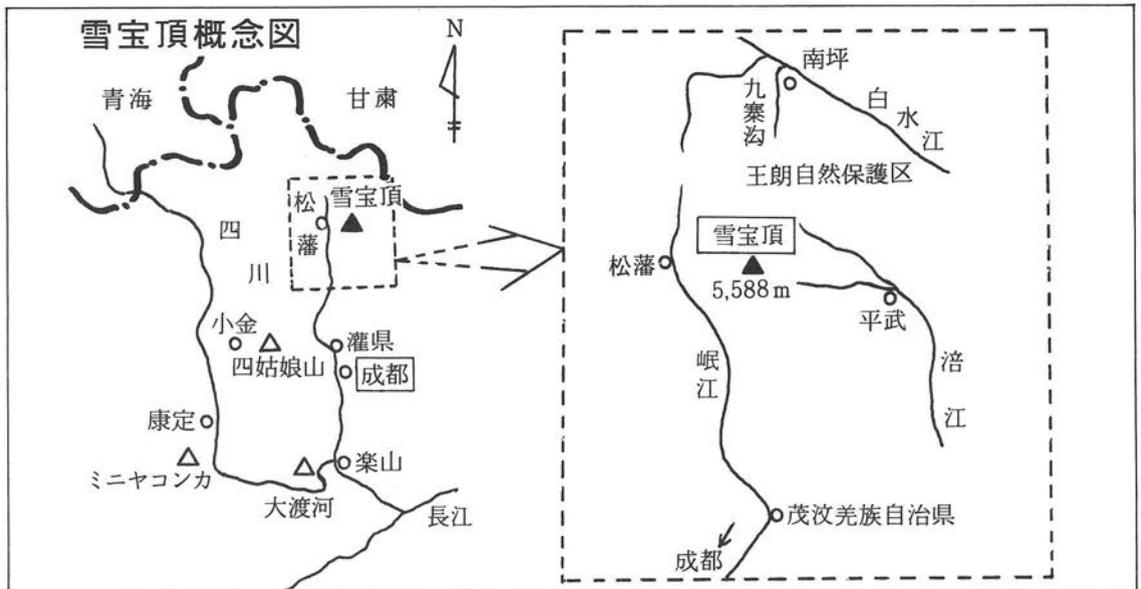
隊長 遠藤 登 (Endo Noboru)

②コンテニユアス・クラブ

— 日程概要 —

7月25日 成田発(10:00)→北京着(JAL-781)  
 26日 北京発→成都着 (飛行機)

⑤1965年 台湾・玉山 (3,997m) 隊長  
 1968年 韓国・雪岳山、隊長



1971年 マナスル(8,163m)副隊長  
登攀隊長 八木原 圀 明 (Yagihara Kuniaki)

②群馬ミヤマ山岳会

⑤1972年 ダウラギリIV峰(7,661m)  
1975年 ダウラギリIV峰(7,661m)  
1978年 ダウラギリI峰(8,167m)  
1981年 ヤルン・カン(8,505m)  
1982年 ダウラギリI峰(8,167m)  
1984年 ジチュ・ダケ(7,000m)隊長  
1984/85年 冬期アンナプルナ(8,091m)

隊長

1985年 黄河源流探検 隊長

1985年 エベレスト(8,848m)隊長

隊 員 中 岡 久(Nakaoka Hisashi)

②東京白稜会

⑤1978年 トリスル(7,120m)  
1981年 ランタン・リ(7,205m)  
1985年 K2(8,611m)副隊長  
隊 員 天 城 敏 彦(Amagi Takahiko)

⑤1983年 ヌン(7,135m)

隊 員 菅 原 和 明(Sugawara Kazuaki)

②ラリグラス・アッセント・クラブ

隊 員 森 山 公美丈(Moriyama Kimio)

②神戸カタツムリの会

⑤1972年 モンブラン・マッターホルン

1983年 ミディ〜プラン

1984/85年 エベレスト街道

隊 員 福 山 侑(Fukuyama Tadashi)

⑤1983/84年 冬期チョモランマ(8,848m)

隊 員 菅 野 千 尋(Sugano Chihiro)

隊 員 大 金 信 夫(Oogane Nobuo)

②宇都宮白峰会

隊 員 三 好 喜代美(Miyoshi Kiyomi)

②女子雪氷クラブ

⑤1982年 クン(7,077m)

2. 四川省側陣容

総隊長 四川省人民政府高官(省長クラス)

副隊長 鄭 榮発(四川省登山協会副主席、55歳)

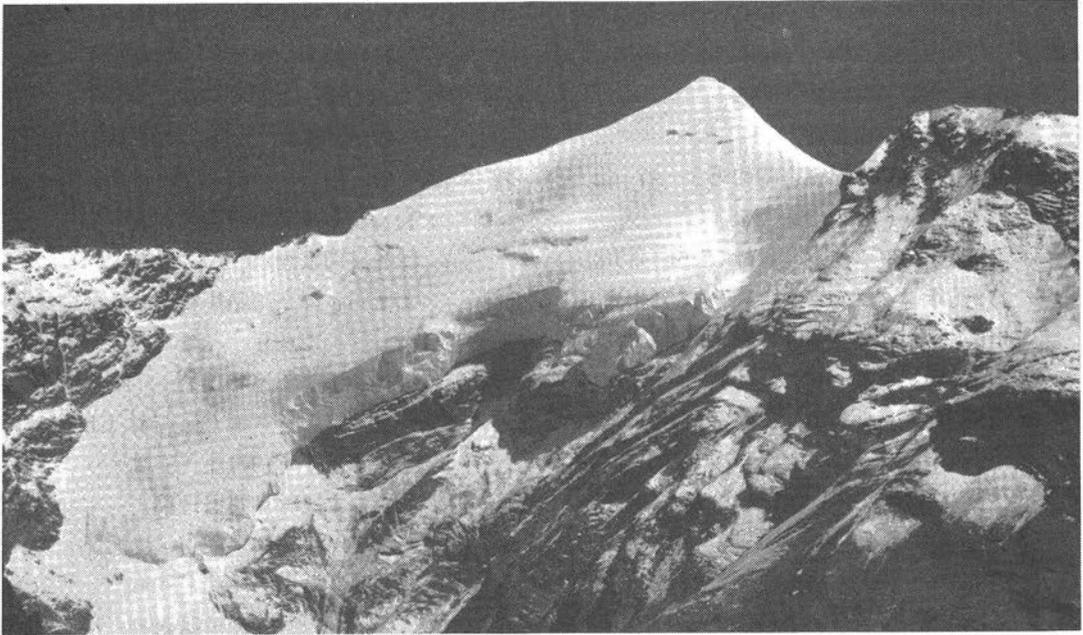
隊 員 張 江援(中国登山協会、33歳)

“ 揚 久輝( “ 、32歳)

“ 王 馬特(四川省登山協会、29歳)

“ 王 華山( “ 、29歳)

“ 李 慶( “ 、26歳)



### 霊山、雪宝頂の概要

雪宝頂は、またの名を雪欄山といい、中国四川省の阿坝藏族（アバ・チベット族）自治州の松潘県にあり、海拔5,588 mのこの山は、岷山山脈の最高峰である。

雪宝頂は松潘県の岷州から東へ約25km離れた、北緯32°41′、東経103°51′の所に位置している。その内容は、青天を突き刺すような鋭峰で、山群の中でもひとときわ突出した雄峰である。

隣接する姉妹峰には、小雪宝頂（5,540m）、四根香峰（5,359m）、東日志来峰（5,119m）、玉籃峰（5,080m）、門洞峰（5,058m）、東日琪菊峰（5,026m）及びその他の4,500m以上の山が10余りある。これらの山々はいずれも氷河の浸蝕によって成りたった山のため、四方は切り立ち、頂は尖った険しい山容を成している。

雪宝頂は、チベット語では「ドンル」といい、「海螺（ホラ貝）峰」と云う意味である。云い伝えによると、その昔、仏祖の如来が東遊したときに残した法号だと云われる。

仏教徒やラマ教徒は、この山を吉祥と幸福のシンボルと見なし、人類に幸せをもたらす「福山」と呼んでおり、陰暦の6月15日と25日には、大勢の信者が参拝して、仏祖の加護を求める。

同峰への巡礼路は二本あり、その一つは、雪宝

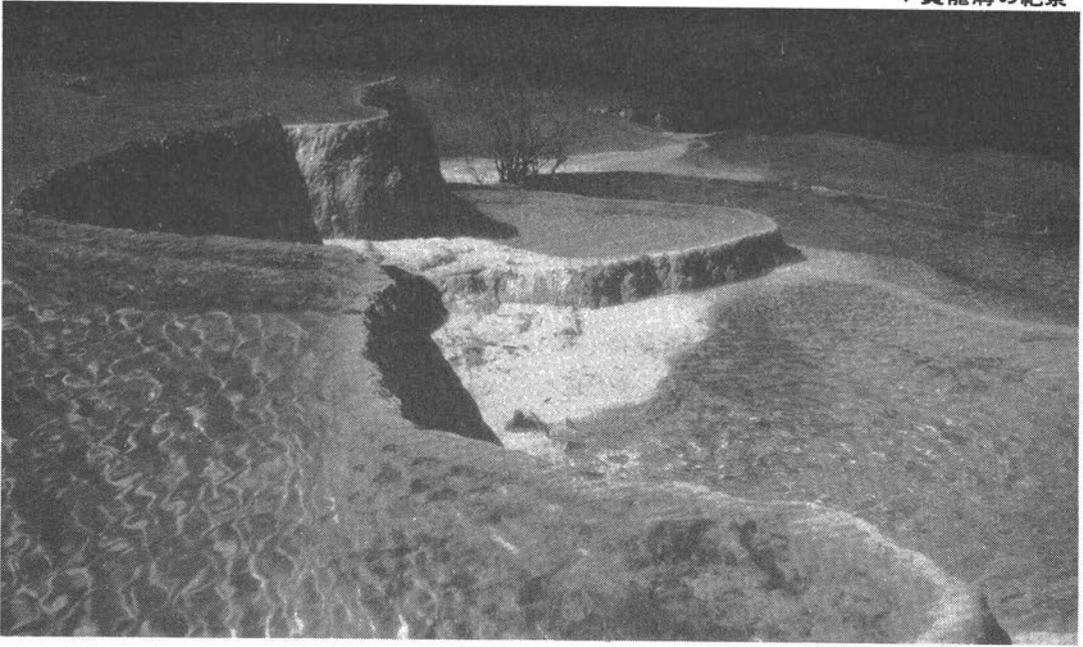
頂の北側にある黄龍溝に沿って北側と西北側を辿る道であり、もう一つは、<sup>ナメ</sup>納米溝に沿って雪宝頂の東南側と南側を辿る道である。

後者の巡礼路の途中には、多くの氷河湖が点在しており、それらの湖の周りには、巡礼者によって大小さまざまな数百もの石や石の棒が残されている。大きいものでは周りが10数mの岩も在り、雪宝頂に近い湖の北側に立てられた石の棒は、遠くから見ると、まるで背の低い石林を思わせる。

これらの石の上には、色とりどりの碎石と文字を刻んだ牛の角が山と積まれており、その石（氷河の礫）は風雨による浸食と人々の手でなでられてつるつるになっている。こうした石や石の棒はいずれも雪宝頂に参拝した信者達が残していった遺跡である。

ラマ教徒は、聖山や聖地を参拝するとき、みな巡礼路のわきに石塚を積むが、自分が最も神聖だと思ふところには、身につけてきた一番大切な品物、例えばお金や首飾り、指輪や腕輪などを石の上に捧げて敬虔の念を示すと云われる。この付近の石塚からは、かなり古い銅貨も掘り出されており、雪宝頂巡礼の歴史を教えてくれる。これらの貴重な文物によると、既に340年ほど前からこの雪宝頂が仏教徒達の聖地になっていたことが窺われると云う。

雪宝頂の北側は、天下の絶景と云われる黄龍寺



である。

黄龍溝の入口から溝の底の三花海までは、全長7.5㌔。雪宝頂の姉妹峰である玉藍峰(5,080m)のふもとの何ヶ所から清らかな泉水が流れ出ている。

この地質構造は石灰岩なので、泉水には大量の炭酸カルシウムが含まれており、これが何千年来流れ続けて、途中に沈積した結果、溝に沿ってあちこちに段々畑状の絶景を作り上げている。

なかでも「金砂舗地」は、最も壮観である。もともと長さ3㌔の山坂だったものが、既に黄金色の沈積物に覆われており、陽光が澄みきった泉水を通して金色に反射して眩く輝く様は、恰も山坂を金の砂で敷きつめたかのような絶景である。

また、小雪宝頂の東北側は、パンダの保護区として有名な王朗自然保護区となっている。

### 雪宝頂登攀ルート

雪宝頂の登攀ルートについて、北西面と南西面から検討した場合、南西面からの攻略が良いように思われる。

南西面からの登攀ルートとしては、次の3つが考えられる。

#### 1. 南稜ルート

B・C(4,170m)から川に沿ってメイン氷河のフィルン盆地迄行き、そこから南東稜に突き上げる

南稜に沿って頂上稜線まで登り、さらに頂上稜線を頂上へと辿る。

このルートの下部は、氷河と岩石のミックス帯で、斜度はそれほどなく、難しさもたいしたことはないであろう。

岩石帯から4,800～5,000mの所をまいて登り、西へトラバースした後、アイス・フォール帯をまいて頂上稜線へと出る。

頂上稜線から先は、約30°程の冰雪面のようなものである。

#### 2. 西稜ルート

B・Cからメイン氷河のフィルン盆地の西側へ進んで西稜に取りつき、そこから西稜を辿って頂上へ行くルートである。フィルン盆地の4,300～4,400m付近から4,800m位までは、岩登りが主となりそうである。西稜へ出てからは、約30°程の冰雪面のようなものである。

#### 3. 南西稜ルート

フィルン盆地から南西稜に沿ってメイン氷河を直上するルートである。

4,600mの下にアイス・フォール帯が点在しており、雪崩とアイス・フォール崩壊の危険性がある。このアイス・フォール帯の上は全て雪の斜面となり傾斜は40°位であろうか。

計画では、南稜ルートを予定している。

## 地域ニュース

### 《ネパール》

#### プレの外国隊

##### ○チョー・オユー (8,201m)

・アメリカ・コロラド隊 (James Frush 隊長 (36) 以下8名) は、南西稜から登頂を目指し、4月17日にC・1 (5,920m)、4月20日C・2 (6,350m) を建設した後、5月8日、隊長とイギリス人のDavid Hambly (53) の2人が、C・5 (7,500m) からアタックして午後2時半、登頂に成功。

・スイス (混成) 隊 (Stefan Woerner 隊長以下12名) は、東稜から挑み、5月5日～16日の12日間に7名が無酸素登頂を果たした。登頂者は、アメリカ人の Marcel Ruedi、Poter Babler、Jan G. Smith、ユーゴの Bogdan Brakus、西ドイツの Rudiger Schleyen、Jorg Daum、オーストリアの Manfred Lorenz。

計画では、ゴジュンバ・カン (7,743m) も登る予定になっていたが詳細は不明。

・ポーランド隊 (Ryszard Gajewski 隊長 (32) 以下9名) は南壁から挑み、登頂に成功した。4月5日にB・C (5,360m)、4月7日C・1 (5,650m)、4月9日C・2 (5,900m)、4月20日C・3 (6,700m)、4月25日C・4 (7,200m)、4月26日C・5 (7,600m) とそれぞれ建設した後、4月29日、隊長と Maciez Pawlikowski (35) の2名が登頂。次いで5月1日には Piotr Konopka (38) が登頂5日には Andrzej Osika (35) と Marak Danielak (35) の2名も登頂。

##### ○ギャチュン・カン (7,952m)

・フランス陸軍・ネパール合同隊 (Jean Claude Marmier 中佐隊長 (43) 以下16名、内ネパール人3名) は、南壁から挑み、登頂に成功した。4月21日B・C (5,050m)、4月28日C・1 (5,800m)、4月29日C・2 (5,350m) とそれぞれ建設した後、5月12日に Frederic Maurel (28) と Eric Gramond (24) が登頂。13日には Marmier 隊長と General Tresallet の2名も登頂。

##### ○カンテガ (6,779m)

・アメリカ・コロラド隊 (Jeffrey G Lowe 隊長 (36) 以下13名) は、北西稜にアルパイン・スタイルで挑み登頂に成功した。4月13日B・C (4,250m) 建設後、5月1日、Miss Alison Jane Hargreaves (24)、Marc Francis Twight (25) の2人が登頂した。計画ではさらにヌプツェの南西壁も登る予定であったが詳細は不明。

##### ○ガネッシュ I 峰 (7,429m)

・スイス隊 (Olivier Matile 隊長 (35) 以下スイス人9名、ネパール人3名) は、西面からの登頂を目指して、4月19日B・C (3,780m) 建設したが、5月6日悪天候のため登頂を断念した。

##### ○ガネッシュ II 峰 (7,111m)

・韓国 (Sogong Univ) 隊 (Park Jong - Tae (34) 隊長以下6名) は、南面からの登頂を目指して4月13日B・C (4,100m) を建設したが、5月9日悪天候と高所ポーターの左足骨折の事故のため、登頂を断念した。

##### ○マナスル (8,163m)

・西ドイツ隊 (Michael Dachar 隊長 (53) 以下西ドイツ人12名、オーストリア人4名) は、ノーマル・ルートから挑んだ。4月15日にC・3 (6,850m) を建設した後、5月3日、C・3からC・4建設に向った4名のうち Wilhelm Klaiber (48) は途中でC・3へ引き返したまま行方不明となった。翌4日、悪天候の中をC・4からC・3に下った3名の内、オーストリア人の副隊長 Dieter Oberbichler (44) は7,200mの地点で滑落し、同行の2人が負傷した彼をC・3に収容し、5月9日カトマンズへ送った。

他の6名が登山を続行したが、5月11日悪天候のため登頂を断念した。

##### ○ブリクティ (6,364m)

・フランス・ネパール合同隊 (Claude Jaccoux 隊長 (53) 以下12名とネパール・トリビューバン大学側3名) は、4月10日にカトマンズを出発して、4月23日B・C (4,450m) 建設。南西稜からの登頂を目指したが、4月29日に断念した。

##### ○アンナブルナ I 峰 (8,091m)

・冬期に11週間にわたる攻撃で南壁のポーランド

ルートの7,300mまで達して断念したブルガリア隊 (Bojan Petrov Atanasov 隊長(37)以下17名)は、引き続きプレ期の南壁に挑んだ。4月17日C・1(5,400m)、19日C・2(6,100m)、23日C・3(7,500m)と冬と同じくキャンプを進めたが、5月11日に断念した。特に6,950m~7,305m間が雪崩と落石がひどく断念せざるを得なかったようである。冬・春継続したヒマラヤ登山としては、最も登山期間の長い遠征隊の一つとなった。

• 一方、北面から挑んだイタリア隊 (Giacomo Stefani 隊長(34)以下8名)は、4月12日にB・Cを建設して登山活動を開始したが、悪天候に阻れて5月9日、6,200mで断念した。

#### ○アンナプルナII峰(7,937m)

• スペイン隊 (Jesus Bereciartua Etxaniz 隊長(26)以下7名)は、北面から挑み、3月28日C・1(4,800m)、4月8日C・2(5,500m)、13日C・3(6,300m)と順次建設した後、C・4(7,000m)迄到達したが悪天候の為、断念した。

• アメリカ隊 (Lucylle Smith (35) / Shari Kearney (34) 隊長以下9名)は、西稜に挑み、4月6日C・2(5,200m)、10日C・3(5,850m)とキャンプを進めたが、以後の詳細は不明。

#### ○アンナプルナIV峰(7,525m)、ラムジュン・ヒマール(6,986m)

• ネパール警察登山探険財団隊 (Basundhara Lama 隊長(44)以下37名)は、北面から2つのピークを目指して、4月17日B・C(5,250m)、24日C・1(6,000m)、29日C・3(7,525m)とキャンプを進めたが、以後の詳細は不明。

#### ○ガンガ・ブルナ(7,455m)

• 韓国隊 (Um Gae Sung 隊長(31)以下6名)は、南面から挑み、4月18日にMiss Ran Hee Nam (29) 隊員とシェルパのアン・カミ(28)が登頂。20日にはChea Un Suk(25)、Miss Jeong Young Hee (26) 両隊員とシェルパのGore Margar が登頂。

#### ○アンナプルナ・ダクシン(7,129m)

• ユーゴスラヴィア(女性)隊 (Marija Frantar 隊長(30)以下9名)は、4月16日にB・C(4,050m)、25日C・1(5,700m)とキャンプを進めて

南西稜から挑んだ詳細は不明。

### 王政批判派が3分の2当選 ネパール総選挙

ネパールの国家パンチャヤト(議会)総選挙の開票の結果、5月28日までに112議席のうち110議席が確定した。「体制内」の有力候補が落選する中で、政党政治を認めないパンチャヤト制度の改革を求める候補者が相次いで当選、王政批判派が当選者の3分の2を占めた。経済不振の中で国王親政に対する不満がいぜん根強いことを見せつけた。

ビレンドラ国王は、直接任命制の28議員を決めたうえで国会を招集するが、政党制支持派の大量当選で国会運営に激しいゆさぶりを掛けられるのは必至の情勢だ。(5月29日 朝日新聞)

この総選挙の後、ネパールの国家パンチャヤト(議会)は、6月13日、マリッジ・マン・シン・シュレスター前国家パンチャヤト議長(40)を圧倒の多数で次期首相に選んだ。

議会で選出されたシュレスター新首相は、6月16日、17人で構成する内閣を組閣し、前内相のウパダヤヤ氏を外相兼国土改良相に選んだ。

同首相は、組閣に先立ち「インフレをなくし、清潔な行政を目指す」と、経済破綻や汚職で悩む内政の立て直しを図る決意を明らかにした。

ウパダヤヤ新外相は、ネパールの国連代表を長く務め、同内閣のナンバー2の地位を確保した。

(6月14日、17日 朝日新聞、他)

## 《中国》

### クンジェラブ峠に定期バス進行

5月1日から外国人に開放された、中国・パキスタン国境に位置する旧シルクロードのクンジェラブ峠(4,934m)に6月1日から週1便の定期バスが運行された。

バスは両国からそれぞれ運行され、パキスタン側は毎週月曜日にソスト地区発、中国側は毎週木曜日にピラリ地区発となっている。これはクンジェラブ峠を第三国に開放することに関する中国・

パキスタン両国の取り決めに基づくものである。

一方、中国外務省スポークスマンは、5月14日の定例記者会見で、中国とパキスタンが国境のクンジュラブ峠を第三国の人々に開放した事についてインドが抗議していることに反論し、「抗議は全く道理に合わないもので、中国側はこれを断固拒否する。」と述べた。

同スポークスマンは、「中国・パキスタン両国政府は5月1日からクンジュラブ峠を第三国の人々に正式に開放することを決定した。これは国境を接する2つの主権国間が完全に正常なことであり、他国が干渉する権利はない。」と述べ、さらに「中国側が繰り返し云っているように、これはインドとパキスタン間で紛争になっているカシミールの領有権とは関係がない。」と強調した。

(5月21日 中国通信)

### 中国探検隊、長江下りに挑戦

中国一の大河、長江（揚子江、全長6,380 km）の川下りに挑戦する中国長江科学調査探検隊の小隊3人が6月5日、青海省ゴルムド市を出発し、長江の水源タングラ（唐古拉）山脈の主峰グラトン（各拉丹冬雪山、6,621 m）のジャングデジュ（姜根迪如）氷河に向った。

この3人は民間からの志願者で、隊長の宋元清さん（36）は、四川省漢源県映画会社の幹部。他の2人は北京の労働者の王琦さん（32）と四川省渡口市電気機械工場の幹部楊欣さん（23）。200人余りの志願者の中から選ばれた。

宋隊長は、出発に先立ちインタビューに答えて、「今回の探検は、物質的条件には限りがあるが、沿岸各地政府部門の支持を得ている。長江下りを成功させて、若い世代の民族と祖国山河に対する熱愛を示したい。」と語った。

3人は四川大学学生会から贈られたゴムボート「四川大学」号と補助ボートを使う。

一方、45人の志願者からなる本隊は、6月3日チベットのラサに到着して準備を進め、5日ラサを発ち、小隊と同じジャングデジュ氷河に向かった。

女性4人を含む本隊は、上海、天津、四川など

10省・市の科学研究者、運動選手、教師、医師、解放軍兵士、武装警察部隊兵士、記者などからなり、最年長は52歳、最年少は19歳。

探検隊は、長江の水源を確認、水源から河口までの自然環境、天然資源、自然災害などの状況を全面的に調査する。特に長江水源無人地帯の地形、古地理環境、氷河・ツンドラ、沼沢水系、高原生物及び水源水系の水文地質、土壌、植生などについてかなり総合的な研究を行い、研究の空白を埋めることになっている。

長江は水源から河口までの落差が5,400 mもあり、世界最大。途中には危険な渓谷や浅瀬が数多くある。これ迄に長江全流の川下りに成功したものはない。

(6月10日 中国通信)

### ウルムチ空港を対外開放

北京からカラチ経由でアジアベバに向かう国際定期便が、中国民航局の認可により、5月18日から帰路ウルムチ空港にも立ち寄ることになった。便数は2週間に1便。

北京～アジアベバ線のウルムチ寄港は、外国人旅行者にとって大変便利であるだけでなく、新疆ウイグル自治区の観光事業振興と対外取引の強化にとっても重要な意義がある。

近代的設備をもつウルムチ空港は、中国の基幹国際空港の1つ。現在、14本の国内線が乗り入れているほか、8本の国際定期便がウルムチ上空を飛んでいる。

中国の残り4基幹国際空港は、北京、上海、広州、昆明。

(5月21日 中国通信)

## インフォメーション

### 東京集会のお知らせ

7月の東京集会は下記の通り開催しますので、多数ご出席下さい。

日時 7月28日(月) PM 7時～

場所 HAJルーム

## ヒマラヤから

### トランゴ・タワー便り

アッサラーム

出発前は色々とお世話になり、大変有難うございました。

全員がイスラマバードに集合して一週間、準備も全てととのいましてスカルドへ出発します。今年のイスラマバードは大変涼しくて仕事も順調に進みました。唯、山岳地方は例年にない多雪と云う話しも聞いており、若干心配ですが、我々の向うトランゴタワーはそれ程影響はないと思います。

今、イスラマバードはラマザン（断食）の月で昼間はレストランも閉まり食事をするのが大変です。毎日自炊をしています。

先日（5/21）にヘルリッヒコッファー隊でK2南稜へ行くイエジ・ククチカとペトロフスキーの2名と一緒に飲む機会がありました。ククチカは今年中に8,000 m峰14座を全部済ませるとの事です。K2が終わったら我々の隊長クルティカと一緒に4～5人でアンナプルナとマナスルにこの秋行くそうです。仲々、豪傑な感じの男です。酒は飲むタバコもスパスバと吸い余り気負いもなく8,000 m峰を登っている様子です。確かに余り小さなことで考えていたら8,000 m峰は登れないかも知れませんネ。

パキスタン人のMajor Sher Khanも来ていました。彼はヒドン・ピークへパキスタン隊で挑むとの事です。

それとポーランドのWanda Rutkiewiczがフランスの3人と一緒にK2に向っています。メンバーは昨年K2で我々も会ったLilan & Maurice Barrad 夫妻とMichal Parmentierの3人です。

その他、まだまだ多くのヨーロッパのクライマー達が当地を訪れているようです。

我々の隊は、隊長クルティカが食糧や装備に全て関っていないと気が済まないようなので若干、手こずっています。まあ、我々のベースで行くことにします。

また、スカルドなどでいろんなクライマーに会ったら話しをしてみるつもりです。

準備で休みなしだったのでキャラバンではゆっくりと写真でも撮りながらノンビリ行くつもりです。

それでは、皆様にも宜しくお伝え下さい。

5/25 16:00 イスラマバードにて

山田

アッサラーム

パキスタンからの第2便ですが、5/26に24時間のバス旅行でスカルドに着きました。

翌27日は準備に1日。そしたら何と、またまたポーター賃が上がっていました。これはP.T.D.C.や観光省も承知していたことの様ですが、ここに来て初めて聞かされました。唯、この賃上げもバルトロ街道のみと思われます。ポーター賃は以下の通りです。

ダッソー～アスコール

$50R \cdot S + 15R \cdot S$  (リターン) +  $15R \cdot S$  (食糧) =  $80R \cdot S$

アスコール以上

$60R \cdot S + 25R \cdot S$  (リターン) +  $15R \cdot S$  (食糧) =  $100R \cdot S$

食糧支給の場合は、 $85R \cdot S$

このため、我々も若干の予算オーバーとなっております。ジープ、トラクターは変ってないようです。

また、驚いたことには、K2に今年は何と9隊も入るとのことです。

それと、ヘルリッヒコッファー隊がポーター用にトラクターを使わせたとの事で、大先生がカラムで初めての事をやってくれました。我々は勿論払いませんが、ポーター達は既にこのことを云ってきています。

また、パキスタン軍がシアチェン方面へポーターを動員して何かをやっている様で、1日の日当が $200R \cdot S$ とこれも破格な値をつけています。仕事はきついような事を云っています。

以上のような事がスカルドで耳に入りました。

羽毛服が必要なくらい涼しい？（寒い）スカルドから

5/27 10:00 PM 山田

# ポーランド登山家を迎えての シンポジウム

冬期ヒマラヤの先駆者として、冬のヒマラヤなどでめざましい活躍をみせるポーランドの登山家7名が日本山岳会の招請で来日した。

5月27日夜に東京・原宿の岸記念体育館に於いて一行を迎えてヒマラヤ登山のシンポジウムが開かれた。

当日出席されたのは、今回の団長であり、過去約20年間にわたってポーランド・ナショナルチーム率いて数多くの遠征を成功させてきた、アンジェイ・ザヴァダ(Andrzej Zawada, 57)、80年冬期エベレストの登頂者、レシェック・チヒ(Leszek Cichy, 35)、ブロード・ピークを22時間でピストンしたり、カンチェンジュンガの冬期登頂者である、クシストフ・ヴィエリッキ(Krzysztof Wielicki, 36)、ダウラギリI峰東壁を初登したルドヴィク・ヴィルチニスキ(Luduik Wilczyński, 34)、フィッツ・ロイの新ルートなどで活躍している、ミロスワフ・ドンサル(Mirostaw Dasal, 33)若手クライマーのヤツェク・ザチコヴスキ(Jacek Zaczkowski, 21)の6氏、(トマッシュ・レヴァンドフスキ(Tomasz Lewandowski, 22)氏は欠席した。)それにパネラーとして山学同志会の坂下直枝氏が加わり、池田常道(岩と雪編集長)氏の司会でシンポジウムは進められた。

先ず、ザヴァダ氏から1939年のナンダ・デヴィ東峰遠征から始まるポーランドのヒマラヤ登山の略史が説明された。

日本のヒマラヤ登山が1936年のナンダ・コート遠征を嚆矢とする点から云えば、ほぼ同じ時代にスタートを切ったポーランドのヒマラヤ登山であるが、第2次大戦後の政治情勢下では、海外遠征などは思いもよらなくなり、1960年になって漸くヒンズークシュのノシャックへと出かけることが出来た。この遠征では10日間の差で初登頂を京都大学隊に取られてしまった。其の後もクンヤン・

チッシュなどヒマラヤでの日本隊との関りは多く、今年はヴォィチェフ・クルティカが日本の登山家(HAJの山田昇以下3名)と一緒にトランゴ・タワーに出かけるなど日本とポーランドの関りは数多く見い出せると話され、会場に来られていた立教大学ナンダ・コート遠征隊の隊長、堀田弥一氏が紹介された。

次いでスライドによるポーランドのヒマラヤ登山が紹介された。

スライドは、1960年のノシャック、1971年のクシャン・チッシュ、1974年の冬ローツェ、1980年冬のエベレスト、1984年のヤルン・カン南西壁、1985年秋のローツェ南壁(最高到達点8,250m)、1985年冬のチョー・オユー南東壁など貴重な写真が紹介された。

スライドによるヒマラヤ登山の略史説明のあとパネラーによる質疑応答に入った。

## ポーランドの登山界

ポーランドでは、1930年代に山岳会が創立された。その頃の登山者数は200名位であったが、南米、アフリカ、カフカス、パミール、ヒンズークシュ、ナンダ・デヴィ東峰などへ足跡を印した。ナンダ・デヴィでは4人で出かけて初登頂したものの2名を失った。帰路、第2次大戦が勃発し、この戦争でポーランドの登山界は多くのリーダーを失った。

1950~60年代にかけてはヒマラヤの黄金時代であったが、ポーランドの登山家は参加できなかった。ヒマラヤへ行けない分、近くのアルプスに出かけたところ事故を起し、山岳雑誌にたたかれた。これがポーランド登山家にとって一つの発憤となり、其の後の活動エネルギーとなった。ポーランド人にとって8,000m峰の初登頂を一つも果せなかった事は一つのコンプレックスとなっている。

70年代に入って7,000mの未踏峰を狙い、クンヤン・チッシュやガッシャーブルムIV峰が目標に上げられ、71年に初めてカラコルムへ出かけた。これがクンヤン・チッシュの初登頂で、この成果が政府に認められた。このクンヤンを契機にポーランドのナショナル・チームは、国際的に価値ある山登りを標榜することになり、それが結果的には新ルートを求めることになった。

やがてポーランド国内の各山岳会からいろんな計画が出されてメチャクチャの様相を呈してきたため、組織を統一する必要に迫られた。

1973年、国内の山岳会を統轄するポーランド山岳連盟が結成され、各都市にある43のクラブが加盟した。

現在、山岳連盟に登録されてる登山者は4～5千人で、結構学生などが多く、大半はハイカーである。タトラ山群やアルプスなどへ出かけるのは、この内の2千人位で、その約1割位が本格的に活動している登山者である。さらにヒマラヤなどでビッグ・クライムを実践するようなクラスとなるとほんの一握りの人数になってしまう。

こうしたアルピニストの養成は、政府からの補助金を受けて行っている。この補助金は、政府のスポーツ省から交付され、指導・教育・トレーニング、タトラ・トレーニング・センター、タトラ・キャンプ……など各委員会に分配される。

登山者の養成に関して言えば、毎春、予算に応じて希望者を募集する。毎回、選択に苦労するほど希望者は多い。筆記試験で選考した後、山のキャンプに送り、体験を通じてアルピニストとして適しているかどうかを選考する。山のキャンプも初めはタトラのサマー・キャンプへ入り、次いでタトラのウィンター・キャンプを体験する。これらのキャンプ経験の後、アルプスやカフカスへ派遣される。次いでヒンズー・クシュやパミールへ派遣されて高所適応性が高められる。こうして漸くヒマラヤへのチャンスが得られる。尤も、全ての者がこのような歩みをする訳けではない。才能さえあればもっと短縮してヒマラヤへ出かけることも出来る。

ヒマラヤへ出かけるには2通りある。1つは単一山岳会で出かける場合であるが、これは先ずス

ポーツ委員会の許可を取得しなければならない。各山岳会は、計画書をスポーツ委員会へ提出して許可申請をする。スポーツ委員会では、地域・山名・ルート及びリーダー、メンバーが適当かどうかを審議する。メンバーが弱体な場合は、委員会から補強隊員を派遣することもありうる。審議の結果、許可された隊には補助金が割り当てられる。

もう一つはナショナル・チームの派遣である。3年に1度位、政府が全額援助してナショナル・チームを編成する。勿論、個人負担金はなしで、メンバーは全国のクラブから厳選される。このメンバーのセレクトはリーダーに決定権がある。そのため、3年に1度開催される山岳連盟の大会は、その代表者を選出する投票があるので感心が高まる。何故ならこの代表者は3年の間、絶対的権力を手にすることが出来るからである。

ポーランドの登山界について以上のような事がザヴァダ団長から説明された。

次に幾つかの質疑応答を紹介する。

— ヴィルチニスキさんは、80年のダウラギリ東壁の際、イギリス人との合同隊として登ってますが、あれはどのようにオルグナイズされたのですか。

ヴィル あれはクルティカがマッキンタイヤなんかと個人的に作った遠征で、4人だけの計画として出かけた。ポーランド側は外貨が自由にならないので、食糧を調達。イギリス側が旅費と装備を負担した。あの遠征では、それよりもスイス隊との競合で、現地でスイス隊の許可を取るのに苦労した。

我々は皆がナショナル・チームに入って登山するわけではない。登山をレースとして捉えているのは極く僅かである。自分はスポーツとしてはなく、ただ山へ登ることが楽しいから自由にアルピニズムを続けていきたい。

自分はナショナル・チームに参加した事はない。遠征の費用は、クラブの会費やメンバーが働いて稼いでいる。

— ポーランドでは1976年のノジャックでC・ズレック氏が11時間で登頂したり、ヴィエリッキさんが22時間でブロード・ピークをピストンするなど、こうした記録挑戦と云うものがポーランドに

はあるのですか。

**ヴィエ** それは全く個人的な考えでしょう。私にとってそれが第一の目的はありません。ブロード・ピークでは当初予定したルートの下部の壁が非常に危険な状態のためノーマル・ルートから登るしかなかったの、それならもう何回も登られているので1日で行ってみようと思っただけです。

これを他人がまねをするので困惑しています。

— 冬期ヒマラヤ登山の問題点についてお伺いしたいのですが。

**チ ヒ** 何よりも難しいのは、今迄の既成概念に捉われず、それ迄考えられた事に挑戦する事です。精神面が一番ですね。それ迄は、ヒラリーなどによって冬の7,000 m以上に生命は無いと云われてきたわけですから、それに挑戦する事が難しいのではないのでしょうか。若し、やれると信ずる心があれば、後から歩き出せば良いのです。僕は、難しいことを標榜する登山者ではありません。然し、冬のエベレスト登頂の後、ほんとうに良い気分になりました。

風とか寒さなどの問題は装備で解決されます。

— ザヴァダさんが最初にヒマラヤの冬期登山を目指した考えもチヒさんと同じですか。

**ザヴァ** 年代は違ってますが勿論同じです。

— ドンサルさんはフィッツ・ロイの新ルート開拓などで活躍されてますが、フィッツ・ロイはヒマラヤへの準備だったのですか。

**ドン** 僕は何にでも興味を持っている。そんなに歳でもない。冬が好きだから冬登るのも好きだ。フィッツ・ロイは、ポーランドでは一つの夢みたいなものがあるから、直ぐにチームを作って出かけた。勿論、ヒマラヤへ出かける準備の一つとしても考えられる。

— もう一度、パタゴニアへ戻っていく考えはありますか。

**ドン** 勿論です。僕はヒマラヤだけでなく、キリマンジャロやノルウェーなどいろんな所へ出かけて行きたい。

— 昨日、ザヴァダさんら30年代の人と話したら今の若い人達は、ロック・クライミングが多く、余りアルパイン・クライミングをしたがらないと云ってましたが、ザチコヴスキさんはいかが

ですか。

**ザチコ** ほんとうにその道でうまくなりたいと思ったら、それだけを多くやったほうが良い。自分よりも若い人達にもっとうまく岩登りをする人が現われたら、僕はヒマラヤへ出かけます。

— 日本では最近、低圧チャンパーを用いて積極的に高所順応訓練を行なう事が試みられておりますが、ポーランドではこうした試みをされた事はありますか。

**ザヴァ** 昔、軍の施設を借りて実験した事はありますが、それによって高所適性者を見出す事はできませんでした。若し、そうした施設を用いて高所適性者を見つけられる方法があるのであれば、是非、私は教わりたいものです。唯、私個人の考えとしては、折角、大きな山登りに行くのにそんな狭い部屋に入って訓練することは好きではありません。

— ポーランドの人達の強靱さは、我々にとって驚異的ですが、日頃どんなトレーニングをしているのでしょうか。

**ザヴァ** 私はもう歳ですから、睡眠を充分にとるよう心がけているだけです。昔から山へ行くためのトレーニングと云うのは余りやりません。

— ポーランドの山と云うとどんな所があるのですか。

**ザヴァ** 山らしい山はポーランドの南のチェコとの国境沿いにあるタトラぐらいです。勿論、ワルシャワ附近には山はなく、そうしょっちゅう山へは行けないのでサー時代の古い館のビルダリングなどをしています。

— 最後に皆さんのこれからの夢などを聞かせて下さい。

**ザヴァ** 冬のK2登山を計画しています。

**チ ヒ** 月の山でも登ったら？

**ヴィル** 僕は地球だけで良い。

**ザチコ** 完璧なアルピニストを目指したい。

**ドン** 各国のアルピニスト達と友好を深めたい。

**ヴィエ** 僕は夢と云うものがない。

**ザヴァ** 彼はそう云うものの今秋は、マカルー西稜の他マナスル、アンナプル南壁をククチカと2人でアルパイン・スタイルでやろうとする欲張った考えをもっている。 (文責：尾形好雄)

# ウルグ・ムズターグ初登頂

1985年 秋

周 正  
(Zhou Zheng)

## はじめに

中国の地形図を一見した時に目につく最も突起した部分は新疆ウイグル自治区の南に横たわる崑崙山脈である。崑崙山脈は恰も大地の背骨の様に西から東へと連らなる一大山脈である。

昨年10月、アメリカ山岳会と新疆登山協会から成る合同隊は、東部崑崙山脈の最高峰であるウルグ・ムズターグ(6,973 m)の未踏峰に挑んだ。

アメリカ側は、George Bush 副大統領を名誉会長に仰ぎ、Daniel J. Evance 上院議員が総指揮、副総指揮はアジアの高峻山岳遠征隊の多くのリーダーを務めてきた74歳のRobert. H. Bates、隊長はアメリカ人として最初にガッシャーブルムI峰(8,068 m)に挑んだNicholas. B. Clinch(54歳)。その他のアメリカ側メンバーは、1963年に西稜からチョモランマの頂に立ったThomas. F. Hornbein(55歳)、1974年にソ連のレーニン峰(7,174 m)に登ったPeter. K. Schoening(58歳)、アメリカの著名な登山家であるJeffrey. O. Foott(42歳)とDennis Hennek(39歳)、それに地球物理学教授のPeter Molnar(42歳)と地質学教授のBurrell. C. Burchfiel(50歳)。

一方、中国側は41名もの大勢から成り、最年少者は18歳で、これ迄に高所登山を経験したことのある者は僅か2名だけだった。そのため、登山の4ヶ月前にトレーニング・キャンプに参加して経

験の不足を補うべくトレーニングに励んだ。

私は、我々の遠征隊の良きアドバイザーであるアメリカの友人達ともうまくやれた。BatesやClinchと最初に会った時も、彼らはまるで古い友人のように中国語で私に「你好！老朋友」(古い友人よ、お元気ですか)と云って呉れた。

## 魅惑の旅へ出発

9月21日の朝、我々51名は新疆の首都であるウルムチから12台の車で出発した。我々は天山山脈を越えてその晩、庫尔勒(Korla)に到着した。此々から先は、紀元前2世紀の漢王朝時代に西域への道として作られた道である。

9月23日、若羌県(Ruoqiang)に到着。この県は、チェコスロバキア、ベルギー、それにデンマークを合わせたほどの約20万平方キロにも及ぶ広大な面積を持ちながら人口は僅か25,000人しか居ない。

ここでは珍しい2つの植物の成育を見ることができた。その一つは、砂防林としてのポプラ並木で、幹の太さが直径1.5 mもあるような樹々で美しく街を堅固してあった。この砂防林の一片を切り取ってみると、その樹皮の間には砂の粒子が見られ、砂嵐の狂暴さを垣間見ることができた。

もう一つの植物は、“紅柳”と呼ばれる低木がここに成育している。砂丘の上にピンクの花をつけて点在する紅柳の茂みは、荒涼とした砂漠にあ

って我々の目を楽しませてくれる。

また、ここまでドライブしてきた道路(約100kmの範囲)は、干乾しレンガで舗装されており、世界中でも非常に珍しい舗装道路の一つであろう。

若羌県を出発して間もなく、我々は、果しない砂漠の中に立った。灰黄色のドームの様な形をした植物がなければ、正に一木一草の影もみあたらない荒涼とした風景である。私達が時たま道路のそばで見つけたこの植物は「ラクダのさんざし(バラ科の植物)」と呼ばれるもので、それは、ラクダがこのかんばしい香りのする水分の多い大枝を好んで噛むところに由来している。さらにこの植物は、砂の定着にも役立ち、また、その種子は下痢や歯痛にも効用がある。

阿爾金山脈を越えた我々は、青海省との境界に近い、アスベスト(石綿)資源の豊富な茫崖(Mangnai)にやって来た。此々はあらゆる物が銀白色の埃でおおわれている。この銀白色の不思議な国のような様子は、アメリカの友人によって衛星写真で紹介された。

### 珍しい動物の宝庫

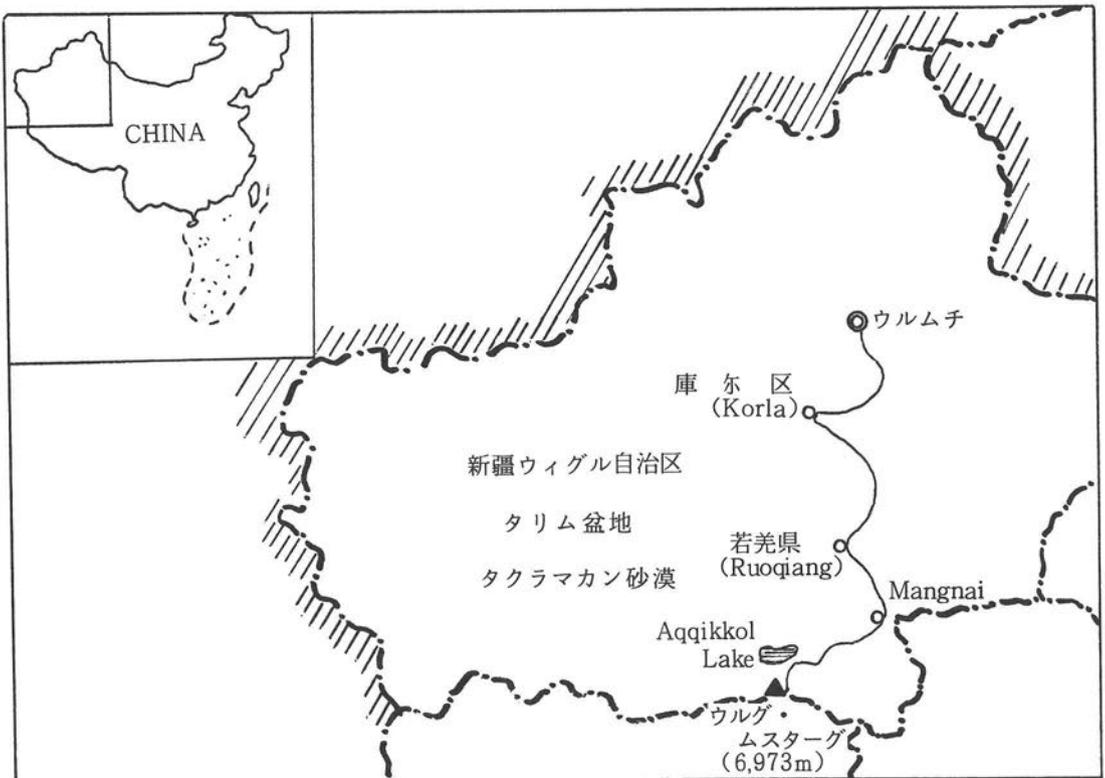
9月28日の朝、我々は、やわらかい砂の道跡の無い所を車で走り、無人地帯へと入っていった。それでも、この辺りは今回の旅で最も興味ある場所の一つであった。そこには中国でも最も大きな自然公園が横たわり、おびただしい数の鳥獣の群れや珍しい動物をみる事ができた。

この地区にはざっと見積って約6万頭の野生ロバが棲息すると云われ、それらの野生ロバは、飼いやられたロバよりもはるかに大きく肥えている。毛は腹部や4本の足の内側にある白い部分を除けば全てかっ色である。

標高4,250mの阿貝克庫勒湖(Aqqikkol Lake)のそばでは、我々の右側の小さい丘に約100頭ほどの野生ロバを見た。

我々の鄭錫林隊長は、良く動物の習性を知っており、その彼がこの野生ロバを見て「彼らは我々と湖面に面して漏斗状に小さく広がった丘の方へ競争したがっている。」と云った。

そこで彼らの思惑を十分に確信してから、我々は時速60kmのスピードで運転を開始した。我々の前方には30頭ほどの野生ロバが居たが、運転開始と同時に休んでいたロバも一斉に前方へ駆け出し



た。ロバは我々の車と並行して走り、最も近いところでは僅か30mほどの距離をおいて走った。その内、1頭の子ロバが疲れ果てて我々の前で止まってしまった。我々の運転手は車を止めて飛び降り、無邪気な企てをしたこの愛すべき動物の写真を撮ろうとした。然し、彼はこのロバに触れる事は出来ず前方へ逃げられてしまった。

湖畔のキャンプへ戻る途中、我々は丘の斜面に黒い点を見つけた。近づいてみるとそれはこの地方に棲息するもう一つの野獣である雄のヤクであった。そこで6人が車から降りて大声で叫ぶと、ヤクは大きな頭を揺らしながらふさふさとした尻尾をおどけて見せた。聞くところによると、これはヤクが激しく怒っているサインだと云うので、私は同僚達を車の中へ呼び戻した。するとヤクは物凄いはえ声を上げながら駆け下って来て我々の車を追撃してきた。ヤクは、我々の車迄300mほど手前の所でこの望みのない追跡を断念した。我々は、自分達のタイムリーな退却によってこのヤクの猛襲をかわすことが出来た事を祝った。何せこの巨大な固まりは1トンもあり、我々の乗っているランド・クルーザーなどは言うに及ばず、重たいトラックでさえひっくり返しかねないのである。其の後、我々は阿其克庫湖からベース・キャンプ迄の3日間に6回ほどヤクの群れに出会ったが、我々の運転手は、その都度注意深く運転し、ヤクとの距離も充分に保って走った。

また、湖畔を横切っている時に3度ほどかっ色の熊を見た。この熊は、体重が400kgほどで胸に“V”状に白い毛が生えている。稀には首のまわりに白い縞が入っているのも見られた。我々が最初にこの熊を見た時、カメラを持って近づいたら湖の中に分散して逃げられてしまった。

次に広々とした大地で遭遇した時は、熊の尻が今にも車のバンパーに触れそうになったが、その時は、賢く車の車台の下にもぐりこみ後から逃げ出してしまった。

3度目は小さい丘の斜面を逃げ登っていくのを見かけたが、我々の車はその斜面を登ることが出来なかった。

この地区には、チベタン・ガゼル（小型のカモシカ）が10万頭も棲息すると云われる。このガ



▲頂上へのルート

ゼルの雌が子を産む時は、雄は極めて莽猛となり来襲するものは何者でも鋭い角で突き殺そうとする。従ってこの時は腹をすかした狼でさえ近づかない。

チベタン・ガゼルは、時速75kmの速さで2～3時間一気に走ることが出来る。この素早さのために、この快走の動物の写真を撮ろうとする我々の企てはいつも裏をかかれてしまう。

また、ガゼルの角は、鎮痛・解熱の効用があるため古くから漢方薬として用いられてきた。

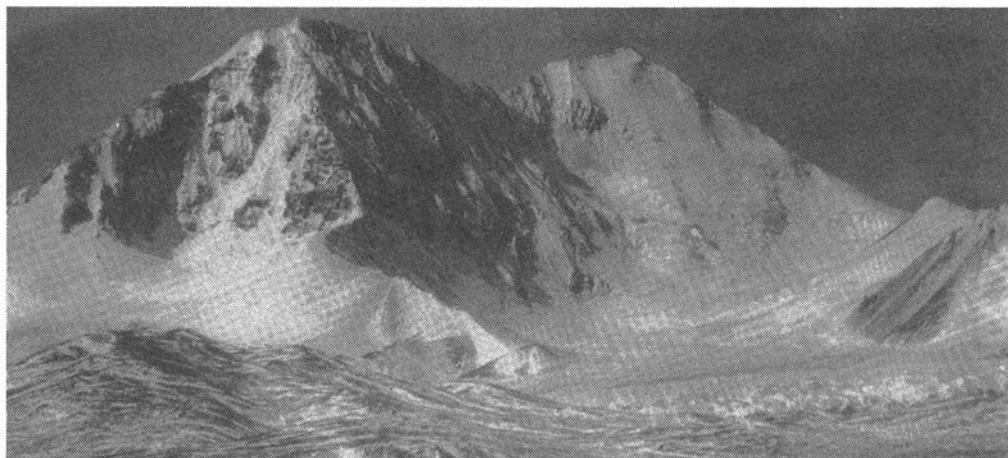
高度4,500mの高い断崖のふもとで我々は意外にも地上200mの所にイーグルの巣を見つけた。それは高さが2m、広さは約1平方メートルほどのもので、巣の占有者は近づく冬のため何処かへ離れてるようであった。近くの丘の上から注意深く双眼鏡を覗いてみると巣は30～40対のガゼルの角で作られており、巣の上は僅かな枯れた草や羽、それにガゼルや他の動物の皮などでおおわれていた。我々は、湖畔のキャンプ地の近くで1対のガゼルの角を拾ったが、重さは1,650gもあった。イーグルの力がどれだけのものか考えてみると良いでしょう。そしてこの巣が作られるのにどれだけの労力が強いられるのであろうか。

10月2日、我々は5,250mのベース・キャンプ地に到着した。8張の大型テントと8張の小型テントが建てられ、我々の“新崑崙村”は出来上がった。

## 科学調査活動

我々は、早速テントの外へ出て科学調査のフィールド・ワークを始めた。

▼東部崑崙山脈の最高峰・ウルグ・ムスターグ (6,973m)



Burchfiel 教授は、何気なく石を拾い上げてはたたき割って小片にし、アメリカや地球上のどこにも無いような珍しい花崗岩を見つけようとしていた。

中国チームの地質学者、趙紫云氏は彼のテントの前の小川から緑の水晶を拾い上げてきてはハンマーで割って銅の拉子を見つけていた。

後に、我々は此の地で鉄、ニッケル、クロム、銅、金などいろんな鉱物を含有した鉱石を見つめることが出来た。

Burchfiel 教授の言葉を借りれば、“東部崑崙は、どこもが宝庫のような素晴らしい場所である。”との事。

10月4日朝、旗を掲げるセレモニーがBCで行なわれた。

我々が Bates 副総指揮から中国々旗をウイグル人の Paz 隊員に手渡され、王鄭黄氏からは Peter 隊員に星条旗が手渡された。これら2つの旗は、アメリカ人と中国人の友好協力のシンボルとしてアンテナの両側に掲げられた。

そして、ムズターグ峰偵察隊として胡峰嶺リーダー他6名の中国側メンバーが選ばれた。

Clinch 隊長は、衛星測量機“Dopler”とユニ・レンジャーを用いてムズターグ峰の位置と高さの正確な地理を測量し始めた。彼は、若し正確な数字と位置を算出することが出来れば、ムズターグ峰が地球上の火山で最も高いかどうか判ると云った。然し、彼は後になってこの山は火山帯に位置するにもかかわらず火山ではないとの結論を下した。

アメリカと中国の科学者達は、この山の北面で幅2km、長さ80kmにも及ぶ巨大な断口を発見した。この断口が出来た要因としては、恐らくユーラシア大陸とインド亜大陸の間にあるプレートのラミング（突き当たり）によって引き起されたものか、または青藏高原とタリム盆地間のプレートの移動によるものではないかと指摘された。裂け口は、暗緑色岩のすじとなって走り、その両側の上には灰赤色の岩がのっかっている。これは今から1億年ほど前のラミング現象の中で、海底の下からマグマが圧搾されて押し出され固ったものと考えられる。

この断口から200mほど離れた所で、我々は幅200m、高さ65mもある巨大な氷舌を見つけた。末端は長さ20mもの氷柱の林となっており、正に稀なる美しさであった。

また、ムズターグ峰の南東面には約300mもの大きな氷河が横たわっており、ここに貯蔵される雪と氷の量は1,000億立方メートルにも及び、それは新疆北部の阿爾泰山脈の全量をも超える量である。

### 登山活動開始

10月5日から登山活動が開始された。

C・2(5,800m)への荷上げに5日間費やした。中国側の50名とアメリカ・チームは一緒になって1人20kgを荷上げし、全部で2トンの荷物をキャンプ地へ運び上げた。

其の後、4日間、豪雪に見舞われ、全てのキャンパーはテントに閉じこめられ、唯、天候の回復を待った。この間、1隊員が救助を求めに出かけた



▲C・3 (6,150m) へのルート

がトレールは約1 mもの深い雪ですっかり吹き消されていて徒労に終り、テントに戻った時、彼の衣類はすっかり濡れてしまっていた。

10月18日になって漸く天候が回復し、この日、6,150 mの地点にC・3を建設した。

好天は翌日も続いたが、風力7、気温 $-20^{\circ}\text{C}$ と云う気候で、1パーティがC・3から上部のルート工作を試みたがギブ・アップしてしまった。

翌日、彼らは6,650 m迄高度を稼いだが、それ以上高くは行けなかった。

ビデオ・カメラとフィルムを担いでいた鄭錫林、東建丙の2人は、周囲の景色をビデオに収めようと離れた僅かの間にルートを見失ってしまった。彼らはトランシーバーでルートを見失った旨を伝えてきた。直ちにC・2で救助隊が編成されたが、彼ら2人は翌朝3時まで $-30^{\circ}\text{C}$ の危険な外を彷徨った。もし、あのまま長い間とどまることになったら恐らく凍え死んでいたことであろう。

10月21日、5人の中国人(胡峰嶺(シボ族)張保華、アルダシ(カザフ族)、マムト(ウイグル族)、鄔前星)から成るアタック隊が最後の攻撃に出た。

70m程の急峻な氷壁を登って行くと高さ8 m、幅30mほどのかっ色の岩壁帯に阻まれた。この岩壁帯の右側は下にヒドレ・クレヴァス<sup>ヒドレ・クレヴァス</sup>が数多く錯綜する絶壁で終っており、胡峰嶺隊員はこの岩壁帯を素晴らしい岩登りのテクニックで抜けた。さらにその上部で約200 mほどの岩壁帯を登り、漸くムズターグの頂上へと肉迫した。然し、頂上まではさらに蒼水でおおわれた傾斜70度ほどの氷壁が150 mほど続いていた。時刻は既に午後4時を回

っており、影が谷のずっと下まで長く延びていた。水銀温度計は $-30^{\circ}\text{C}$ まで下っており、吐く息はたちまちフードのふちにツララとなって下がってしまった。

最後の50 mは、一步一步に超人的なアルバイトを強いられた。激しい息切れの為、彼らはピッケルにもたれかかっては短い休息を取りながら登っていった。長い休息は凍傷の危険があるため、彼らはお互いに声をかけあいながら前へと進んだ。

3時間後の午後7時27分、彼らは全員が頂上に到達した。登頂成功の知らせは早速、3つのキャンプに届けられた。頂上には10分程滞在し、旗を持っての記念写真を撮ったり頂上の石を拾った。然し、生憎とこの頂上での記念写真は日没後だった為現像しても写ってはいなかった。

闇夜の中を手探りでルートを探しながら下降する中で事故が起った。胡峰嶺隊員と張保華隊員が約150 m程滑落したのである。彼らの滑落は何ものによっても止める事が出来ず、翌朝、負傷した状態のところを発見された。

Burrell と Peter それに Schoening の3隊員がC・3で第二次アタックの準備をしていたところに負傷した2人が飛び込んできた。彼らは中国人の同僚と一緒にこの負傷者を担架でC・2へと降した。其の後、彼らはB・Cで Hornbein、Dennis、Jeffrey らによって34時間にも及ぶ手厚い治療と看護を受けた。

この事故の御陰でアメリカの友人達のムズターグ登頂のチャンスは無くなってしまい、我々はほんとうに申し訳けない気持で一杯であった。然し、我々が彼らに詫びた時、Schoening 隊員は笑顔で「我々は自分達が登頂できなかった事について残念には思っていない。我々は一体ではないか。」と云ってくれた。

何と素晴らしい言葉だろう。それは真のアルピニストの心に宿る大変な団体精神である。この団体精神があらゆる登山の偉業を可能とするのであろう。

(CHINA SPORTS 1986年3月号より)

(訳:尾形好雄)

# 卓奥友峰登頂

(Cho Oyu, 8,201m)

張 俊 岩  
成 天 亮

チベット語で「喬鳥雅(Qowowuyag)峰」として知られているチョー・オユー(卓奥友峰)は、ヒマラヤ山脈中部に位置する海拔 8,201m の高峰で、その高さは世界で第六位の高峰にあたる。同峰は、チベット自治区定日県とネパールの国境に位置し、東には世界最高峰のチョモランマ(8,848m)、西には世界第14位のシシャバンマ(8,012m)などが隣接する。

解放されたチベット人民は、12の大路線に沿った指導の元で、富裕かつ文明の新チベットの建設、団結に乗り出した。勇敢なるチベット登山運動員は、1985年の春にチョー・オユー峰を征服し、チベット自治区成立20周年の慶賀に素晴らしい贈り物をした。また、祖国の登山事業に新たな貢献を成した。

このチベット登山隊は、成天亮隊長、仁青平措副隊長ら33名の登山隊員と13名の行政連絡官及び輸送担当者で構成された。

4月4日、登山隊は主峰北面の加布拉氷河(Jiabula Gl.)舌端に到着し、4,959mの地点にB・Cを建設した。その後、物質輸送及び高所順応訓練、氷雪技術訓練などを行い、B・Cの準備が完了するのに10日間を費やした。

4月15日、A・BCを5,700mに建設。

その後、隊員達は酸素不足の中で狂風や吹雪にもめげず、さらにC・1(6,300m)、C・2(6,950

m)と2つの前進キャンプを建設し、それぞれのキャンプに食糧や装備を荷上げた。ルート途中の6,800m地点には約100m以上の高さを持つ急峻な氷壁が立ちはだかったが、隊員の技術力量を集結させてこれを突破した。

6,950mから7,150mにかけては、ズタズタの水崖帯があり、3日間の反覆活動を強いられた。偵察結果を比較しながら、最後に一條の安全なルートを見出した。

メーデーの前日、隊員達は6,950mの第2キャンプで出発の命令を待った。そして5月2日前は好天候に見舞われるだろうとの天気予報も受けた。

その日の午後、12名から成るアタック隊は、6名のサポート隊から輸送の補給を受けながら7,200mのアタック・キャンプへ迅速に登り、3張のテントを設営した。一方、3隊員は第二日目の任務完了(登頂成功)をより確実なものにする為、上部ルートの偵察に向い、ルートを整備してキャンプへ戻った。キャンプ・サイトは、狂風も止み切り一面非常な静けさを取り戻していた。

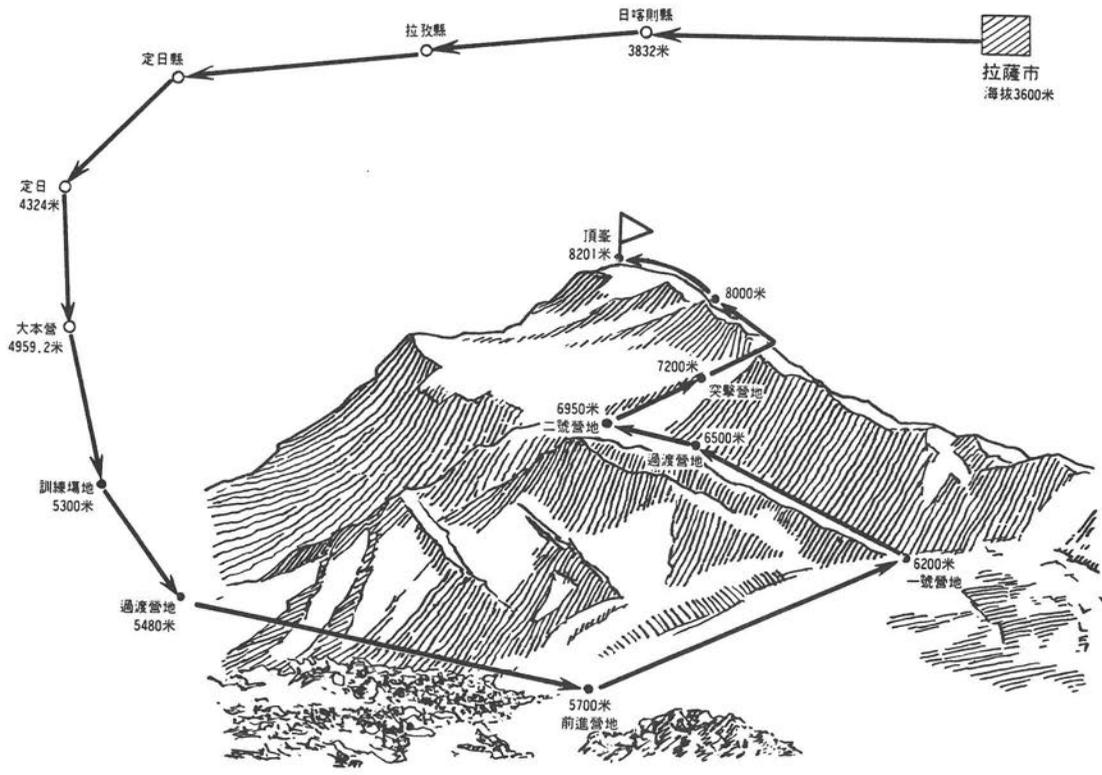
翌日は、メーデーなので隊員達は興奮し、テントの中で円座になってバター茶を飲んだ。彼らは頂上へ到達する迄の一切の困難を克服する事を決心し、願望実現を望んだ。

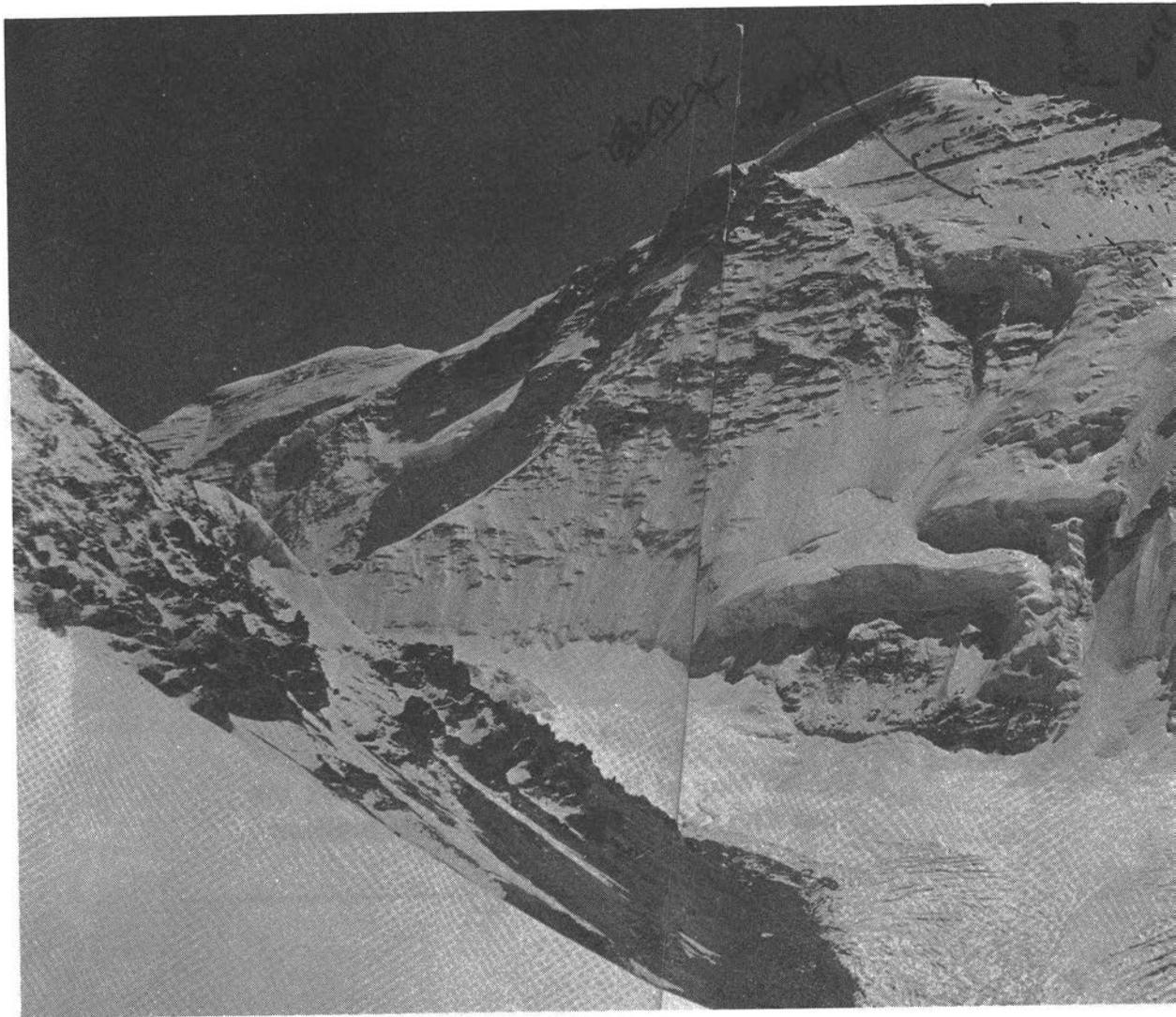
5月1日の早朝、隊員達は起床後、直ちに出発準備にかかったが、相変わらず風が強く10時近くなっても依然としてやまなかったが、10時40分にな



▲世界第六高峰 (8,201m)

**A Sketch Map of the Expedition Route by the Tibet Cho Oyu Mountaineering Expedition**





って漸く風が弱まりだしたのでアタックを敢行することにした。

隊員の1人が病気のため後に残り、11名で頂上に向った。顕著な西山稜に沿って左下方の軟雪の斜面と蒼氷の斜面を奮勇登っていった。7,500 mに横たわる第一岩壁帯に到達した頃より、再び風が強くなり出した。彼らは、大岩の陰で暫く休息して風を避けた後、再び登高を開始した。一つの岩場をトラバースした後、蒼氷の斜面を登っていった。ルートは極めて難しくなり、先に立って登る者は、後続する者のためにステップを刻まなければならなかった。さらに別な場所ではアイス・ピトンを用いてロープを固定させて通過せねばならなかった。

過去、8,000 m以上の高峰登山に向った多くの

登山家にとって酸素補給は欠くことの出来ないものであったが、今回、我々は無酸素登山でこれに挑んだ。その為、困難は更に大きいものとなり、体力の消耗は著しかった。隊員の登高スピードは極めて遅くなり、息切れが激しく、3～5歩登っては立ち止る、と云ったありさまであった。そして、彼らは、8,000 mの高度で“死の地帯”、“禁断の地”などと呼ばれる所へ進入した事を知らされた。

この頃になると、太陽は西に傾き、空は薄暗くなってきた。

2隊員が疲労困憊のため登頂を断念して下降した。他の仁青平措登攀隊長以下の勇士達は、全国・全区人民の信頼に支えられて、互いに短かい呼びかけや身ぶりでもって励ましあいながら勇を奮



って登っていった。

最後に冗長な氷雪斜面を登っていき、間もなく9人の勇士達は、前方にもうそれ以上高い所のないことを見つけて驚喜した。足元には雲海が広がり、頭上には時折、青空が現われた。

北京時間の17時50分、9名のチベット登山運動員は、世界第六位の高峰、チョー・オユー（卓奥友峰）の登頂に成功し、頂上に五星紅旗を打ち立てた。

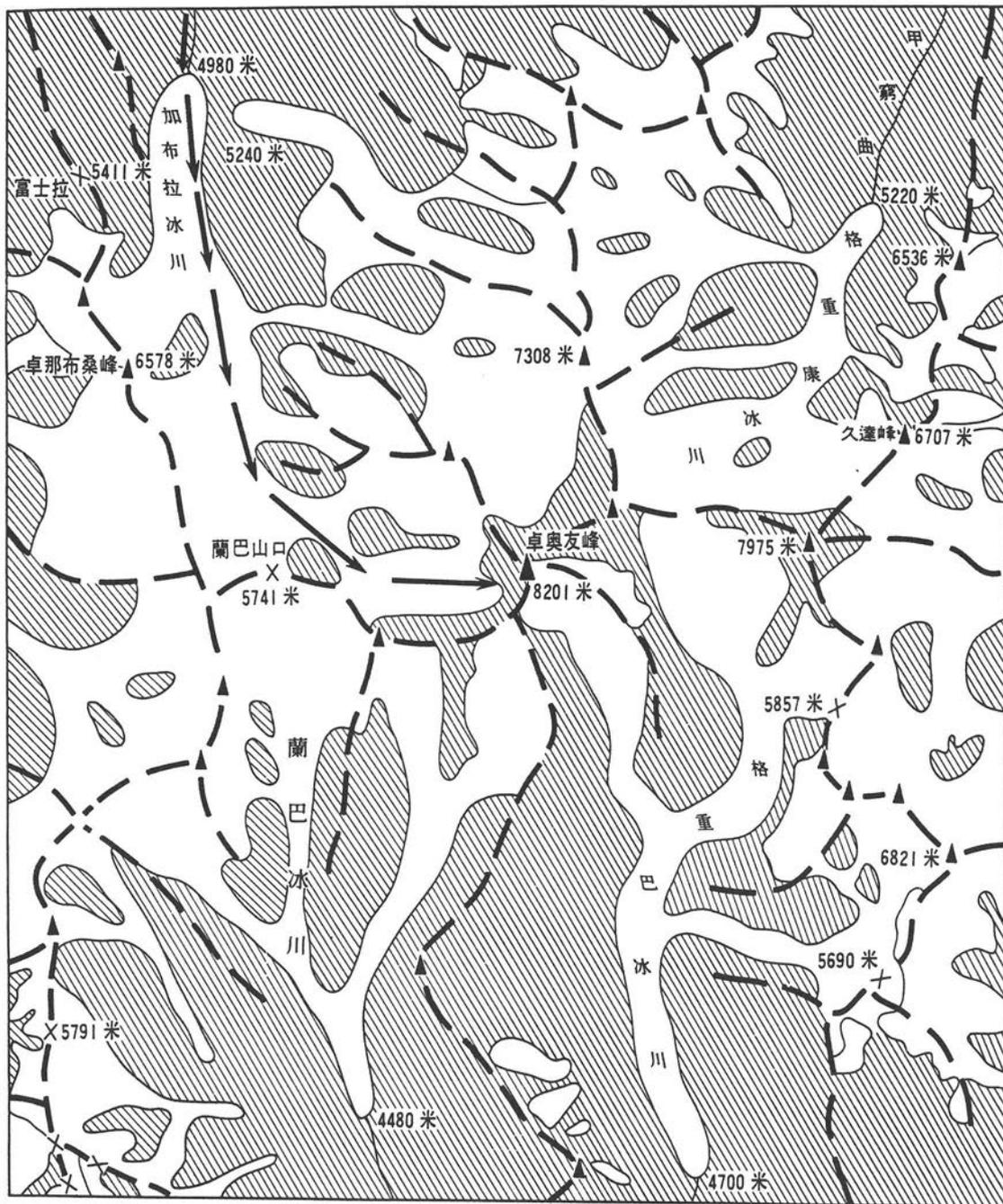
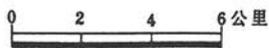
仁青平措登攀隊長の感激の声は、超短波のトランシーバーによってA・BC及びB・Cへ届けられた。他の隊員達も写真を撮ったり、標本を採取したり、偉大な征服に対して互いに“ハタ”の交換などをした。また、頂上には五星紅旗の図案に「西藏登山隊」と刻んだ金属製の記念板を埋めた。

頂上に30分程滞在した後、9名の隊員は溢れる勝利感の感激に浸りながら下山の途についた。下山の途中で夜の帷は落ち、彼は雪氷の白さと僅かな月明りを頼りにアタック・キャンプへ戻った。其の後、同僚達のサポートを受けて、無事にベース・キャンプに下山した。

西藏登山隊によるチョー・オユー登頂の勝利は、チベット人登山運動員が勇敢な不屈の精神を高所登山に吹き込んだ事実によって説明された。チョー・オユーの登頂を自治区成立20周年の為に献礼しようとする彼らの願望は、ここに実現され、また、祖国登山事業に新たな貢献も印された。

（報告書「世界第六高峰」より）

（訳：尾形好雄）



# チベットわが祖国

## — ダライ・ラマ自叙伝 —

### 木村肥佐生訳・註

3月に所用で中国へ出かけた際、短かい日程であったが、念願のチベットを訪れる機会を得た。

チベットの首都ラサへは、三国志の都、成都を後に四川・チベットの重畳たる山なみを俯瞰しながら僅か2時間のマウンテン・フライトでチベットのコンガ空港に降り立つことが出来る。かつて禁断の地と云われたチベットも現在では近代文明の便利な乗り物を利用する事によっていとも容易に行けるようになった。此の地へ入城せんがために苦心された先蹤者達の艱難辛苦が嘘のようである。

ラサの市内へは、空港よりヤル・ツァンポーの大河に沿って車で約1時間半ほど遡る。ツァンポーにかかる大橋を渡って暫くするとラサのシンボルとも云えるポタラ宮殿が見えてくる。この壮麗な白亜の大宮殿と対峙した時は、さすがに念願成就の想いがこみ上げて感慨無量であった。

所用の合間を縫ってダライ・ラマの夏の宮殿と云われたノル布林カ宮殿を見学した。今だに敬虔なチベット仏教徒が賽銭を上げ、床にひれ伏しながら今は主不在となった礼拝堂や寝所などの各室を祈りを捧げながら廻っているのが印象的であった。

1959年3月のチベット動乱の折り、このマハカラ礼拝堂で最後の祈りを捧げたダライ・ラマ14世は意を決してインドへの脱出を図るのであるが、帰国後、本書「チベットわが祖国」を手にして、また、感慨を新たにさせられた。

余談が長くなったが、本書はダライ・ラマ14世の自叙伝の完訳である。チベット仏教の法皇親下であるダライ・ラマ、その歴代のダライ・ラマの中でも14世の半世は悲劇に満ちたものである。農夫の息子が転生探しの結果、ダライ・ラマとなり、やがて中共軍のチベット侵攻を受けて、亡命、海外流浪と云う悲劇を強いられていく国の話は涙を

誘う。

既に、14世の自叙伝「My Land and My People MEMOIRS OF THE DALAI LAMA OF TIBET」は、日高輝一氏の邦訳で「わがチベット、ダライ・ラマ自叙伝」(講談社、昭和38年)「この悲劇の国、わがチベット」(蒼洋社、昭和54年)と2度にわたって出版されている。然し、訳者あとがきにもあるように、この両本は残念ながら何れも完訳ではなく、本書の「第六章 共産中国にて」「第七章 弾圧と忿懣」、「第九章 決起」の全文が訳出されていなかった。本書ではこれらの部分が全て訳出され、この三章全文が盛り込まれたことによって、チベット動乱におけるダライ・ラマの亡命、チベット人の武装蜂起に至る迄の経過などを詳しく読み取ることが出来る。

巻末には資料として、チベットの憲法、中央人民政府とチベット地方政府のチベット平和解放に関する協定(17か条協定)、チベットに関する国際条約リスト、チベット史年表、ダライ・ラマ親下、諸外国訪問の記録などが収録されており、また、脱出後のチベットの状況、中国の対チベット政策、チベット問題の現状などについては訳者の解説が付記されており参考になる。

訳者の木村肥佐生氏は、「チベット潜行10年」の著者として知る人も多いであろう。氏は昭和15年興亜院モンゴル語研修生として内蒙古に赴き、その後、蒙古人巡礼としてチベットのラサに潜入し、昭和24年にチベットから追放される迄ダワ・サンボの名で滞留された稀有の経歴の持ち主である。(〇)

A 5 版 361 ページ 昭和61年1月15日発行  
頒価 1,800円(送料300円)

(連絡先)東京都武蔵野市境5-24-10(〒180)

亜細亜大学アジア研究所

## ■ 寸 感 ■

一国の最高峰が未だに未踏峰のまま取り残されている。7,541 m もの高さを持ってヒマラヤのシャングリラと云われる雷龍の国・ブータンに屹然聳えている。処女性、高度、山容から云っても地球上に数少なくなった玉峰の一つと云えよう。然しながら、こう云う山はある面では好かれぬのか興味を示す者は少い。折角到来した千載一遇のチャンスを生かせなかった当事者としては、逃した魚は大きく、唯々慙愧の念で一杯である。“山は逃げる”と云われる諺が身にしみて感じられる昨今である。

今年も夏から秋にかけて垂涎の未踏峰を目指して4つのH A J 隊がヒマラヤへ向う。世界の情勢から鑑みて再びこうしたチャンスに恵まれることはあるまい。後々悔を残さない為にも不退転の気概で臨む位の心構えが必要ではなからうか。

## ■ 事 務 局 日 誌 (6月)

4日(水) ネパール観光省登山局長 P. M. シ

ユレスター御夫妻歓迎会(新宿、7名)

7日(土)~8日(日) 雪宝頂隊梱包

10日(火) 雪宝頂隊々荷、業者引き渡し

11日(水) 事務局打合わせ(山森、尾形、飛田常務理事)

16日(月) ヒマラヤNo.176 発送

ギャラペリ隊打合わせ

23日(月) 東京集会(17名)

27日(金)~29日(日) ギャラペリ隊梱包

## ヒマラヤNo. 177 (8月号)

昭和61年7月10日印刷 61年8月1日発行

発行人 柴田 金之助

編集人 尾形 好雄

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1  
淀橋食糧ビル506号

# ヒマラヤへのステップ

## エクスペディション & トレッキング

ネパール、インド、パキスタン、

ソ連(中央アジア)へ遠征、

トレッキングを計画の皆様へ。

航空券から登山要請、現地手配、入国査証(ビザ)代介手続き、遠征隊・トレッキング用山岳保険加入に至るまで適切なトータルアドバイス、手配を受けさせていただきます。

ヒマラヤ以外にもヨーロッパアルプス、アフリカ、北・南・米etcの格安航空券、情報もあります。

## 世界山岳旅行クラブ

運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号  
住友海上火災登山トレッキング保険代理店

# (株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区恵比寿西1-8-1 かずさやビル3F 303号 ☎03-476-1200 担当 藤原

主催:株ロータリーエアサービス 〒105 東京都港区新橋2-2-4 ☎03-504-0111 担当:佐藤(一般登録第332号/取扱主任者:伊藤園子)



## TREASURE TOUR



### EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 —

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、  
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号



カラコルムの秀峰、ウルタル山

## 遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。  
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

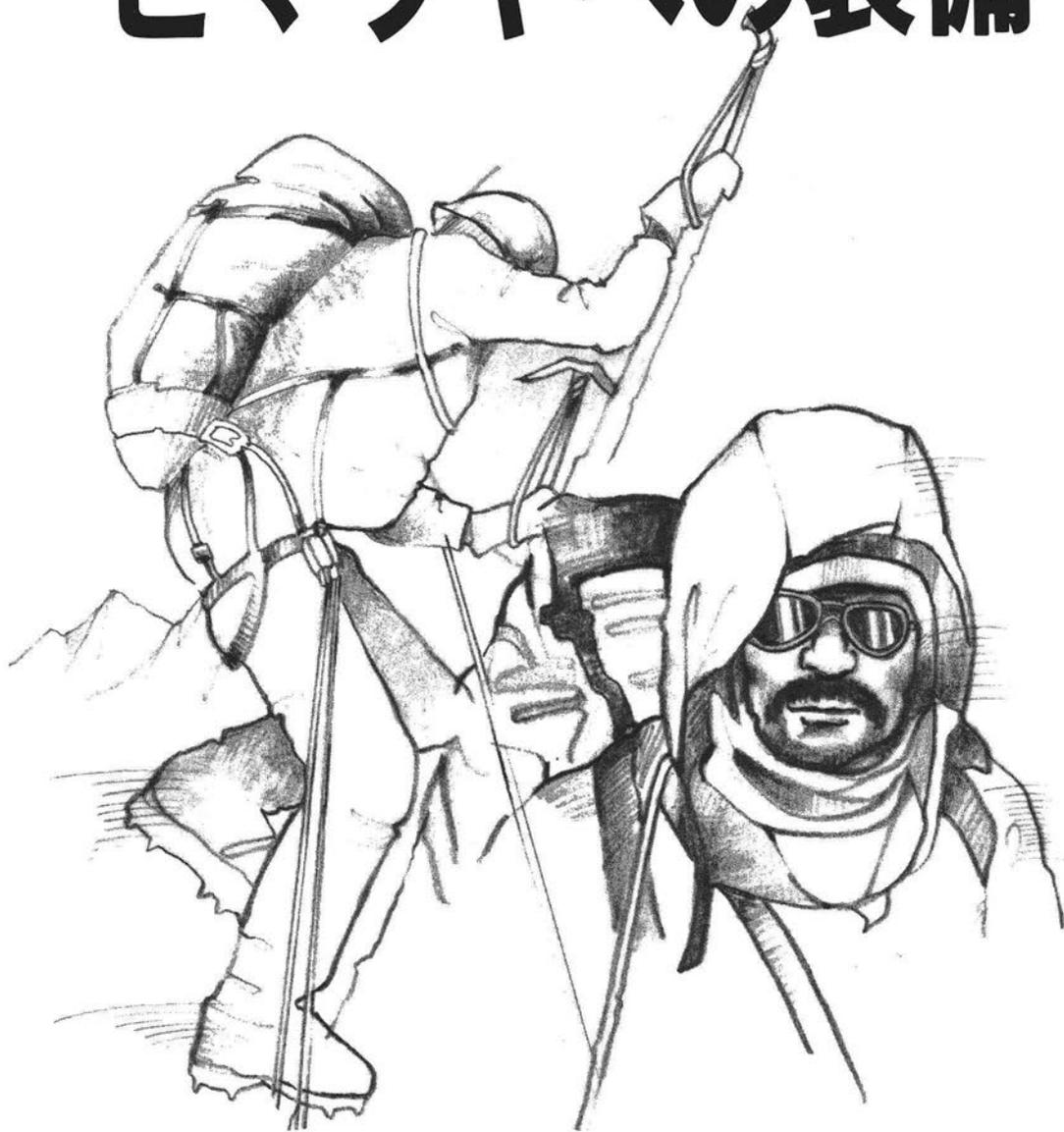
トレッキング・海外登山  
シルクロード・秘境旅行  
のバイオンア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)  
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3 ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)  
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017  
KATHMANDU, NEPAL ☎216338  
運輸大臣登録一般旅行業607号

# ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



## ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305

- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジョルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004